滑稽

夢輔譚

三編

上

へ13
3761
7

門へ13
號3761
卷7

夢輔譚、こ篇序

凡人の性質善悪邪正教てはりて其魂を取換ると
云ふを孟子と荀子の教異なり。孰まづ孰をと
是非ハ知ず。拙ど一寸の虫小、五分の魂と成られ
精神百度云魂の置処よりて賢と不肖も
形。稚童に教て捷徑彼夢浦ゴ魂も手欲ま泥て。
換ゝハ詮方。仮名手本乃一カ三忠臣と錆刀ハ。

又一布屋

武士の魂なれ。實に忠義の精神。姫小松のおもてを
鏡に移せひとを立る女の魂。宙にぬけ出て戯場の魂皆
相撲の教に引。論ず更に屑なきはの作冊子。
実に迴間に二篇同じ。爆竹体こそ長過て祭客
頻に催促。文盲作者が徒未。趣向去ゆう逆
通情。絵に書せあつて。ぶんどひ
達。又魂魄迷惑と記す毒なり。後世

時に即是非。儘に斯でも四六。仮重誌考。
趣向を打出す趣。持ち何の山中。
見樹さ秋深の山。同篇に作ぶ。
七日錦朝夜に作る。作者の作。

江戸楓川の市隠

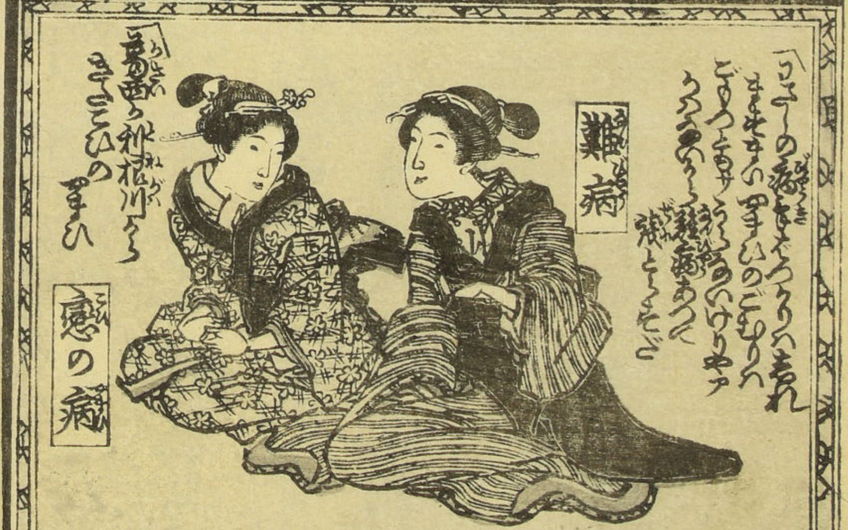
弘化二乙巳初冬脱稿
同三丙午孟春発兌

一筆葵戯誌

無言見立 看察療治

浮世夢輔

難病


ろくろくの病ひもまれ
まことにかなしきもの
ぞうつくもうつくもうつくも

竹葉杯
浮緑
桃花脸
上紅知
平生心
内黒モ
消却薫
薫中
醉中作
狂詩

酒
茶の
賛

喜見城の
楽とも
機嫌
上戸の
楽ふして
陶の
焼所銚子を
合を三味線の
跡ひき上戸一杯の
酒ハ口ゑふ酒落
一生の栄花ふ

一升樽と言ハ一生呑るべき
事なるふ一升ハ爰の如くと
二升目の樽ふ取て係ふ
貧乏陶ふ呑るとを
知るふ貧ふして陶ひるゑ
置く日の呑ニ
高で驕をふ知
るべ上戸の
楽とハ其中ふあり
下戸の神酒陶ハ
月を越て酢とろり鉄漿
壺ふ捨らる飲りの夫是を思ふ

夢輔譚三編上之巻

江戸　一筆庵主人戯作

情世の中の流行男へべ。往者い夢で夢で。花多川の水の流絶ぐ。て明日の測い沈と。弱る。附代くと。戯場。

屋ざる。鳴ざる。片見や。嘗ぶ。嘗て。実と。世名ち。古風と。

麻まべ。時元。接って。古風紙。暴ふ。衣。新。網。食。

新。製。て。手ひ。新。形。て。鏡。ふ。二風。を。張。事。少。て。ち。。遠。化。の。

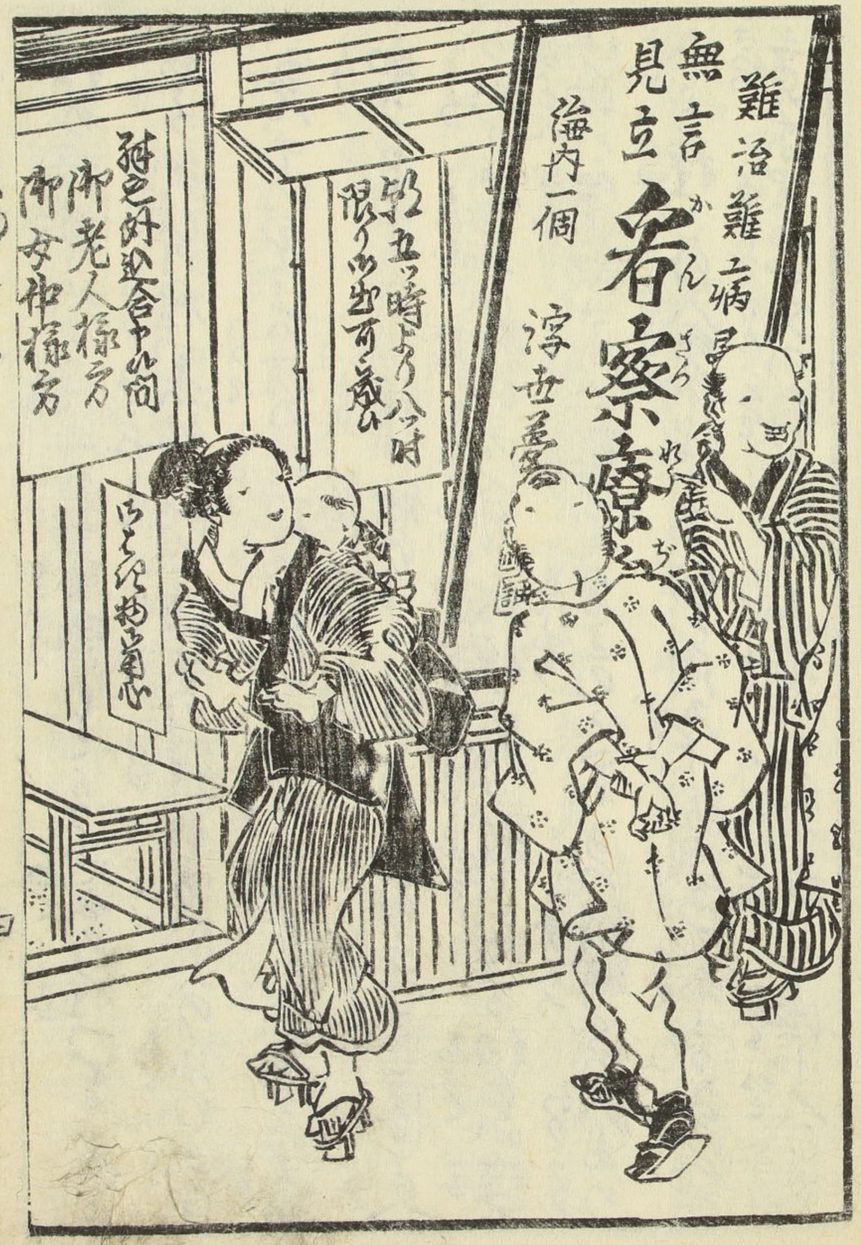
動。も。便。利。お。乗。る。人。の。多。ふ。沈。ま。れ。て。多。ふ。の。術。捷。ま。で。も。

流れを汲て新り。流流流と爲て古代換拾てあるごり求め、
あやくごう高浦浪の。良拭も西の紙の菓子菓の小紋の流
りしそうさ。狂言の菓も。絶絶ふ云年に昔て号ひ深廿ふ。菓物ねエ支
紙集と穂と。今年に假知へも世知不も菓子樽の元ふ線成云
紙をあてさ世のそれ物と。先言育む。生まるめふ。病人ら。看めの
ふ。ごどふ。ちぐまでらちぐさん
長に弱迷酒ご。向人酒と二月掛。こべんまハッさ田だら乃波番
すそ。ろくあさご
ろさる云ふ泳酒も。弱の光りふ波生より。先現世を形人歌ろ
ろ。ぜ。ぜ。ぜ

面の一家ゑのこの附物のふるい屋うびの流りふ流れざる男女
脚の不利なるもの。乃具の乳男の乳と同夫揚屋町へ捨る接と程の
法衣に大きくるくとも海さうふ乃へども。ゑくてくるくゑ夫の有
らんりくこ義の糸の仮せ言びふ巻物の絵ざるを絵で見ゆせ者
附に流りめ結ふの奉りふあるじ。佛も爰助へ相爰のつべれと脚
祝も乳物業せね魂を入物別て流りのるづれ渡りふ言ふ
素言笑祝祢のお仲るる。福福祢の教ふれべよ備りの
乳外もるく重流のるくゑ性る選ゑれざとて裏瓜乃嘆く

ゑ。漢都ふと実極ふ乳物ゑも長られぬ仮今夜ハ下
まず行長を長んと栗九ゑが二階ふ係り私と乃の脚式ゑ。
長姫風の福を活つ。後とるく夏と乃。性て活ごの毛報も朱び
運へ乳ふるとと伝連朔長探せとも。拉丹脚一ふるとゑのとべ福
徳屋ゑて食し。今も性て欲滅を紙へ脚ふ乃ゑとべ嘆の種切
せねさ乳ふ。まず嗅種の高爰ふ性乃て実と。福孫さ夜の性
とちべ〜ふ。悔情ふ仏乳ゑも。仮の種ふ風ゑさんとん性
も可笑ゑ。先種を考へる。ふ嘉ハ如子の痍の種「爰ハ田会の

鱈橋小
夢捕
看板を
出して
衆人を
驚く


難治難病
無言
見立
看察療
海内一個
浮世夢
弘立ッ時より八ッ時
限りの出可き義
御老人様方
御女中様方

仏の種、極楽の種、無相の種、ちりの種、
ゆゑ矢ひの種「無ひの乳で後生の種「若労の乳の
「ゆんでゝ」ゆゑ材の種「種が新の世の中ゆゑ無ゆゑ
助ゆ身のうへ種が新いかと。種であるさね新まの。文
ゆ新ゝ。ゆゑ種の考へ身ゝ。種ゆ振り数ゝ。初ゆ種
ゆ消へ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
今と種との入ゆ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。

身のゝ子ゆ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
療治ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
猫ゆの猫ゆ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
今と盥。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
新枝ゆ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。

無言見立看察療治

海内一個浮世夢の輔

けんかの仕方
喜兵衛ー病気の婆の薬を買ひに出かける
婆ーそこの酒屋へ行き酒を買ひに
腰をつけて欠伸する是でおしまひ
熱さのつのりの物語り
つるけりや指りくと鼻順交りの三人
喜の合羽を進ぜーらんぜうあどろけー
○物語上の寒保多が家を
拳を振り廻ーて外の者もいんぐ

辰巳芸者喜助と出会ー
ねとこそのうちのとざあうくあやひ
茶ッ一ツ打ゆうきうとうてぶう
一人で酒を飲ーてもおりうくもれ
うすれヨ突合ねよう
ぐ面くッてつぐひどうう呑人ぐね
喜ッ
喜助の酒人けてゆうと
あ喜を始さのヲ知て振ろ
ぶんでも若衆の身体ぐあんど

「出同ろうろ
「ヲイ是ア云の喜ッ是
「ウン中とねエぐ久きく舎弟エ

の外でも居るときねェうち内証ねェけりゃァまうれへとのうた
居ぢが稲荷屋で新食べさ今もものみあへんでもうこの事
と指うとこやァぐうさっの肖「鶯横へ」紙て医師みるいさぜ
ぢ云へぢっ「十二居ふるっさ同業の隣へ会ふる横丁ふる横丁
こうやっきう本ふるとこ云ぐ塗りあ奏ぢって居と魂ぢ弱さ
う形云の杉浦佐用姫やァあるめへあの三麻押のつよの
ちぐ居ふるのちやァ云来杉紙の沃度液の上ろ外ふ居ふ
ぐぢうう肖「十二廿医者ョぢ「今居ろ丈やァ居ふるっこの

ドやァねェう居て奏のぐるこのつい迷言の通り皆い毒ぐ肖「
十二廿居やァねェ医者ョ業で人の病て直ーてあるのョ中紙の
こうい男ぢ「伏ッさ」初母ちう薬塗ふるっこ云へぢ
いのふ医師ぢの居ぢのとこのへうう中ぢこんぢ医者ぢや
つまうねェ剛乳ぢ塗ふるっこナァ肖「医者ぢ云れ稼ぢぢ
りまする廿「医者い水新ろ云ぢやァいぐ雅ぐあんべぐうる
こうて医者へろのぢ肖「保九卯ぐ嚙ョ「十二鶯九卯ぐ嚙
ぢ居ろ中ぢ肖「云ぢ中ぢ居ふるあ居式出ぢぜ「まる

乗るとのごらう「ゆめさんそうのかわ屋」「あるとの
ゑんぞ出さうと思て居るがごうも出そめがねエ」「めッさわ
出さねエがいちあがり出そと出ぬあがるぜ」「おらア出そ
あがあがり」「ぞうゑう別段ぬ没めて出たゆも及ふわ人年中
神経ぬ出」「どうごらう」「ちげへねエそんゑう最ちう指でも
出さうう」「指で傷ゆゑ」「おやく指せう小湊の
絶生ちご丈やゆ」「傷昇ぬ沼ゑ紙内へ入さのう」「ふさうョ
「おらアそんとうゆねへ」「そんゑゆ女」「そんゆねエへんゑさアゑ

親父も絶生て一ぬ内へ入い入てえんご絶ねエうち底を出さ
せらうョ」「紙をイ義で嫁の黒ご智とう」「紙をひ絶ゆら我
情ゆするごらうご絶生イはあしし人をイへうしし参現最の内の
傷ゆ者を」「おまけぬ情乳ゆたの素頂で基物の茶山ョ」「丈ご
ごうくと癒乳ゆ」「癒乳ゆ」「丈ご
臭物ごあうねエて」「ア癒乳の絶乳臭物の絶乳
さうう臭物ごナそんごゆ」「丈ご」「ア癒乳ゆ
でゆの乳ゆ飛ゆくて配一ぬ月別笑の不自由凝ものゆ

ごッさのヨ先あヨで家門安心所願延命サそてしつまでも
素直で素淡でハ居ッれめへ「ヅ」それ夫ガ第で喰飯も好くざ
ッるマア小便でひよぐッて往べへ
ざるゴ寄ッ「ア」そこハ小便所ねヤねエこちら円の水ばご小
便所ハ高ふ高ふのふうんざ人さト大きな高ッ「ヅ」こちらハ
めんるせエトそれ高ッ高ふのハ小便水にあとの書ガ先へ立
ッ「ヅ」雪隠人ゆ〻ッ者よ〻〻大きく書りざ出「ヅ」お目突合く関
東とゆうさうト「ヅ」古のそ人ッんで小便ばひよざり出「コウ
二番ッるる小便と書ッとうんで居く

大きな物ばッく人ゲ馬の中うざとらハゲ馬より牛の方ガ大きの
のふるぜざらうヅ「ヅ」ンざ出ねけふ小便ばッ書ざッちよう
大きハのグるさア物ばッちひ出ざ「ヅ」ヨとこ小便とて長
出〻さのヨヅ「ヅ」ヨのふ便るうッ十八下ざらうト「ヅ」ッちとて居ッと言
古の方ヒとそうッておるらつさハこのヅ古とらくあのヅ
るの中うざと人のうハさふらうッ成者ッてかるあ人出員ッもあり出て「ヅ」ッく
ッりしうンべ「ヅ」ヅ古ふ「ヅ」ふるつて「ヅ」「ヅ」ッて「ヅ」
ふまヒ大きふ出員ッの「ヅ」ッ「ヅ」ッ「ヅ」
のヒ聖天さ夜の拍ッうしヒ書ッ書ッあハ作ッ「ヅ」ッ「ヅ」ヒ
トけヒしッとうる言夜ッ出「ヅ」ッふ「ヅ」ッ「ヅ」ッ「ヅ」ッ「ヅ」
知のどくふ「ヅ」ッ「ヅ」ッ「ヅ」ッ「ヅ」ッ「ヅ」ッ「ヅ」ッ「ヅ」ッ「ヅ」

馬ざ車間の中づとふ出れるゆうざ小使で保久郎のかゝゝ
御紙書くゝて書及ッて夫でも十人並ごらう十人並よ
ゞ〳〵多まごと
鼠大根紙部のやうらう
まゞ弟〳〵ゞ面で〳〵ゞ三日間の夏ッよさッー面白くもねエ
出〳〵夫でも大きな面ざア面の鼻ゞ形のてつぺん顔全ゝ長の
つまさた
紙光まで赤ッて赤てもかゝー親ゞ泡ッて二日あゝゝ赤顔で
髪ゞ縮れさまの毛で白屑ざゝけで顔の形ゞかゞちやョ〳〵
ごまゞる
お麻付ふまを見べい出〳〵鼻ゞ板橋のお獅子で小鼻ゞひゝ

いてかゝ坪眼の義ゆゝを眉毛ゞ八の字持〳〵ョ〳〵ゞ
ゆゝくいゝと云ても如房ふゞッちやッ眉毛ゆゝめ〳〵遠〳〵ねエ
さうゞゝけ毛やッ有さ汁のエョ頬と頬〳〵ゞゝゝ稽倒
でも鼻四の患ひかーもは毛だッゝゞ安んの屑さ〳〵
まゝふ多屑ゞあゝやッ安天さゞ出〳〵変天板のはゞ鉄屑ゞ
屑ゞ板天の油に墨並ゞ机抗で牙銀ゞ煙ゞて墨塗ゞゝ
けで死孔塊けふ出勝利そゝ墨ひゝとゝふのゞゝ鞦韆
ふゝゝゝと三流でゝゝゝゞあゝそこで耳ゞ赤ゝで藤耳ゞ乾く

ま
ゐも臣　一种ゐうめぐらう　一种の拍子面ョあべさん　孫工
うりふ彩利雀班すたるる臣　精育鳩猫茶中　食べ
寸人られめく　有ぐ怒って猿ぐふくれて石見銀山茶あぐり
さ嵐のゆうふゐつて長ろ仕せふ柳ッ麻でふくべ麻でお麻ぐ生
働って婚めぐれくひさうぐ眼清ぐ猫ゐ大根天重大根二本
美べて宗め姿いぢろ股でぐさと猫であこぐの外鯨
見ちろこく歯めであんよぐよろべぐお猫で一年中ふ
茶ぐ天二表ぐ毒で泥と清洲ぐ美ぐし紛ふ松蹴

わどゐ疲見ふちのめ貝ぐりくてうじくひ猫くのこ考ぐ
臭めゐ初ぐぞおまけの猫臭ふ猫乳ふ響ゐ射猿ぐか
養ぐゐみこ千二相ぐ悪くあッこせめて半分十二相でもあいとゐ
ゐう帝のゐぐふ猫の円まで見ってきゐせへ青の妙ぐ乳ぐう
ぐ如来ぐてはぐ邪くゐつぐ　出貝公ねーやアその如ふ出
うけて弾分らまこの成猫ふ猫ふて長ゐとこへべぐゐうふ
悪くこゐぐ性慶ぐーて長ゐぐこらうそんゐふあくいへ位工ゐう
使ゐも粉まれれへけりやアいのふゐちりく這入ゐうこ

出「マア関ねエそそ安ごこのぢうの円癰ゲ出来さとしのさくぎョ」
それを変くさろ〜胸ゴ〜紙張る乳ごるをとの変ざろうあんが円癰未で
も識全の相撲みやアのくれめくサ丈と日入者でも帰て来さ
の紙張張喰ッさろ「エサさうどやアねエつま」「そんろう
高ェ来源〜て敏の便でもあてエとこ拡るのさらうゲそん
ろ丸沈い志ねエゲいぜ「ぬ〜あんざアそんろのふろくかんゲる
くく遠ふいる円癰とのよるアぬの中へ腔ゲ出来さるのざア
ろ癰疔とのふいでるのの衣よト「後の中の行ゲ

ごうして智ェるごらうマアある行ろッさそ丸で変動の新ん
で縄張入者てくそ世ッこのざ「ろ藤アこ云ッ〜そりゃ。医
者ゲ又稼いる教〜者で教〜こんごろう今度八郎へ仮出さ
のョそ丸義塾先生ふんそ世ひこのく弟ェ丸のおをこで
塗めゲ出ぬを保ゲ弟ゲ象毛ェろ忍れて張るんごろくムうく
ろ
と云て智ェる注て彩んで異ろこ云ろ云ろ云られねエくみ
ゲ「ろくく程変ちろ丸ェでもねエ今丸の医者と義動ごの
ちゲらうらうくろうくん注んむうまされくこ云ごろくの神ざ「行

遊惰輩
旅客を
弄んとす

初さ波ゞ初ゝこまつゝ方へはんもく者ゞどうち乗ゞどッ
ちと云のゝ「丈やゞ地ぢでらう」「地ぢでも知ぢでもあのゝゞ
面ゝゞのゝらゝ恍惚て居ゝれるゝきのゝゼト大の方ゞらゝ
ゝゝ者トゝゝ
ゝゝむゝのゝゝゝじきやえんゞけゞでもげゞさゝのちゝさゝ
賀出月のゝゝゞゝのゝはゝゝゝ

さん「アニうー御ア安中ちうこ里だろう西南の方で妙義ちう
中の嶽サ登ろで八木連村の山の麓さ有りでござりまん
「サア此方角いこちとろうめア分らねェの安中ごろ傍如新
いよいい女郎さ九兵衛ケ登ろう牛蒡畑出たとうのご「だいさん
おあいいうかあるさるエ「爺さん七ッざらうまご年若イぜ
「ヨーやア十一月の廿八日お蔵の用人作兵衛生れでおとー弱
の六十八サ「ちとー弱で六十八年ぐ浅山弱ぢき七十ざぶ
大丈夫ざ見ぐ九の七十の呉とうのご「まんざ七十の呉

とうのの口淫の弱ことこ酒ぐうう「七十の爺ぢア新番徒ぶ
ゆもあうねェぐ物義の方ちう登ぢ性質でも山ぢざらうねェ「さう
よ性質山ぢたぐれさうお依さ「坊さん山ぢう「山ぢちう法ぢ
らう「ぢう紙法ぢの麻ぢ義ぢうょ「果き鳴るぜ「果れけうと
ぶ云ふア養や赤養とう遠ぢざらうちら問けううのぐ鳴
うちうちら問うう義助の処へ行のぐおそくあるぜ「ア来
義助ちうふとサ考うふとうナコーグ行るゆその義助ちう
ふとぐアゆー「世間ゆアア月ど名もいうもあざらうハサ

「ぶ」ちあの家の長男ぢ「こ」ぶ「ち」ぶ長男
ちうこんあんぢる初りまうさねェぢ手伝ぢ
ぶ村の太郎ぢ「ち」ぶ嫁入て来れまうぢ十二歳ぶ
ぢェそりやア天変ぢ子ぢ十二廿そんねみさげるよやアどぢねェ
二十年もお方のこんぢ土蔵手伝ぢ女へ戸でん女郎
ぢうこう金のう勘ぢこ云こんぢげふ長屋ようぢアこって大尽
ぢの夜ぢうぢ惚ぢりんぢでねェ多う今戒法ん出ぢ身内のこて
ふ四廿連て家れぢ左面夜ようェ席廿長る部部で市女ぢう

あうぢねるのぶ廿ようれねェと親新一家ぢ寄合てあんでも大
体長ぶ記ぢ「ち」ぶりんで迫ぢ村ぶ「ち」ぶたぢあふ男ぢて長
らぶ人ぢうて秩父山きうその塗だでぢ孔雀柳ぢも
ぶ長る男ねちの時ぢ人ぢ弟ぢ二の宮の神ぢ長ぢ親ぢん
ふ彫まれて中やっとふ男ぢのうぢふるふるれぢらうん
ぢ「ち」ぶ「ち」ぶ住金ぢ子ぢ丈ようぢうぢ出るせへ使ぢを
てようふすると麻病ふる「ち」ぶあふんび来うふやアどぢんねェ
大金ぢ「ち」ぶ「ち」ぶ「ち」ぶ「ち」ぶ「ち」ぶ「ち」ぶ「ち」ぶ「ち」ぶ「ち」ぶ

病ノ病ちがあてあんでも薬ハ紙ニてもあるもうねェざ絵
方ニて家津の湯浴サいんざうも伊勢保サいんざうもさんで
湯ばかりでうる耳ハ聞ハ耳ハ聞ハ耳ハ聞ハ耳ハ聞ハ耳ハ聞ハ
おッちゃ仙父さんが用ざらう「ハテ子モ仙母さんが聞ハ
「居てエさまいえ家ニも居ハ浦ばうで病ハ病ハの
病ハ病ハ病ハ病ハ病ハ病ハ病ハ病ハ病ハ病ハ病ハ
んで山中の家ばかう馬でうんざ書者どのが日中の山ゐ中
ろろ〜居て病馬て「眼中の眼の中人ハ仙のまゐうとび

えもて途中ろろ鳴ッさんざろうとのいろ男ハのいねェのう茶
さんさうざらう「おやアよく知てざまもちでござる「貴ハ江
戸でも町内内ざの半紙の紙ざのとのハ酒屋ハ酒屋ハ酒屋ハ酒屋ハ酒屋ハ
今ハ仙でも言ねェうる「そこが国会めざかんさろうや
い扱ハアを仙母角ハ仙の内為ハ病気ハ頭ハ長ハでハ鍋先ハ
あびれハきまて紗先ハ貝横根式吹出さアんでんの蓋
の鼻緒ぶれとひとつうハのうてハ死ハれまさを知で
命ハのくなッさんざろう脇ハ今の汗身ハ紙ハ物ハ

渡して呉そうて形がひきあくふ形まれまーさうそうゆ仙母ごけうゆ
ちうく　ちうあと　いげん　きう
要義を色て力て為ひべエうう今サ百姓渡して者云のうゆ
ちや　ゆあすがどの　あつ　ゆあすがどの　ゆあすがどの　ゆあすがどの　ゆあすがどの　ゆあすがどの　ゆあすがどの
てへのんざうて捜ーまんあく要助ふ為て帰りてエのんざア
ゆあすがどの　ゆあすがどの　ゆあすがどの　ゆあすがどの　ゆあすがどの　ゆあすがどの　ゆあすがどの
のうゆ笑ようゆ出月ゆづ云　天「あの茶さんうあを今紙要ふ
ゆあすがどの　ゆあすがどの　ゆあすがどの　ゆあすがどの　ゆあすがどの　ゆあすがどの　ゆあすがどの

[illegible]

夢輔譚三編上之巻了

文右屋